

鳥獣センター通信

山に餌が無くなる冬場にこそ、餌を与えない！
鳥獣被害対策はこれからの時期がとても重要！

さて、いよいよ野生動物にとって山に餌が少なくなる時期(冬)がやってきました。これからの時期、集落内で動物に餌を与えてしまうような行為をなくすることがとても重要となります。

近年、野生鳥獣による被害が急激に増えたのは、集落で、「餌付け」が進んだことが一番の原因であることとをこれまで何度も説明してきました。

では、集落内での「餌付け」が進むと、一体、どういう事が起きるのでしょうか？ 今一度、考えてみましょう！

皆さんもご存じのとおり、人間も含めて動物は、食べるものが無ければ生きていくことはできません。

つまり、生息頭数に見合った餌をその地域で得ることができなければ、動物たちは、そこでは増えることはないので。

以前は、イノシシやシカ、サルなどの野生動物のほとんどは、主に山を生活の場としていました。山にある餌をみんな分けて、暮らしていたのです。

しかし、近年は、人間が住む集落近くに現れることが多くなり、またその地域を生活の場とするものが多くなりました。そのため、農作物への被害が増加するようになったのです。

また、集落近くで得られる餌には、稲や芋などの農作物、栗や柿などの果樹類、イタリアンなどの牧草類など、栄養価が高いものが多いため、動物たちは若齢で発情し、また出産間隔も短くなり、一度に産まれる子供の数も多くなったと言われます。このようなことから、シカなどは近年、その生息頭数が急激に増加したと考えられています。

イノシシやシカ、サルともに捕獲数はここ数年大幅に増加しています。捕獲実績に比べて、その生息頭数は十分には減少していません。いくら捕獲しても、一方で、栄養価が高い餌を与えているような状況があれば、効果的に生息頭数を減らすことはできないのです。

以上のようなことから、これから山で餌が少なくなる冬場にこそ、集落内で野生動物に餌となるようなものを与えてはいけません。

つまり、稲刈り後のヒコバエ(2番穂)や農作物の残渣、残飯等の生ゴミなどを食べられないよう、次のような対策が必要となります。



稲刈り後のヒコバエ(2番穂)



家の近くに捨てられた生ゴミ



廃棄されたダイコンを食べるサル達(提供:岩切環境技研(株))

- ①クブ野菜などはイノシシ等にとっては立派なごちそうとなります。畑の隅などに放置しないでコンポストとして利用するか、ネット等で囲むなどして、食べられないようにしましょう。
- ②家の近くの竹藪等に捨てる生ゴミなどは餌となるだけでなく、集落近くに動物を呼び寄せの原因になります。絶対に捨てないようにしましょう。
- ③稲刈り後の伸びてくる2番穂はイノシシなどは大好物。その田んぼでおいしい餌があることを学習すると、翌年、必ずその田んぼは狙われます。稲刈り後はできるだけ早く田起こしするか、株を焼くなどしましょう。

被害対策に関する問合せ
西臼杵支庁及び各農林振興局
各市町村・各農協・各森林組合
等

☆鳥獣被害対策地域特命チームだより☆

東臼杵(北部)地域

○鳥獣被害対策モデル集落の取組について

東臼杵北部地域では、平成23年度からモデル集落(4集落)平成25年9月現在)を設置し、鳥獣被害対策に取り組んでいます。今回は、その中から延岡市北川町の川坂地区山ノ手集落の取組を紹介します。

川坂地区は、区画整理された比較的条件的良い水田地帯ですが、上流部の山林に近い山ノ手集落では、シカやイノシシによる被害をきっかけに耕作放棄地が発生し、そこが野生鳥獣の潜み場所となり、地区全体に被害が広がり始めました。

このため、集落住民と関係機関が連携し、除草作業を行い潜み場所を解消するとともに、追い払い活動を徹底し耕作可能な田畑の復活を目指しました。



①除草作業風景



②機械作業風景と整備後

北川町では、西南戦争で敗走した西郷隆盛が、地元のソバを食した記録があることから、道の駅「北川はゆま」から、地元産のソバを使い「西郷ソバ」として売り出したいとの要望があり、山ノ手集落ではソバの試験栽培に取り組むこととなりました。

しかし、排水不良や大きな石が混じったほ場が含まれており、集落にある機械類では復活に向けた対応が難しかったため、農機具メーカーの「耕作放棄地解消プロジェクト」に申請し、大型の専用機械による心土破砕や深耕、石の取り除きなどの作業を平成25年8月が行われ、復活した田畑を月が稼働し、復活かした田畑を使って本格的なソバの栽培が始まり、集落の活性化に向かった取組がスタートしています。

今後は、ソバの収穫作業や加工に向けた取組、次の新たな品目への挑戦などについて、地域特命チームとして支援していくこととされています。

西諸県地域

畜産地帯である西諸県地域は、冬場の自給飼料確保に向けた牧草の生産が行われていますが、大規模ほ場への侵入防止柵設置はコストが高く、有効な対策が行われていないのが実情です。これは、収量の減少を招くだけでなく、野生動物への栄養供給源ともなり、さらには、野生動物が牧草地に侵入してくることによる口蹄疫発生の危険性など、家畜防疫上も重要な問題となります。

そこで、約10haのほ場に鹿・猪を対象とした低コスト簡易電気柵を1,500mにわたり設置しましたので紹介します。

○侵入防止柵設置方法
園芸用弾性ポールを用いた5段張りで、雑草抑制シート、電気柵器2台使用(AC100Vタイプ)



電気柵設置状況

○設置時の工夫・注意点
谷間には、雑木落下による電線の損傷を防ぐため、シカネットのみを外側に垂らして設置。
夏場は草が雑草抑制シートを持ち上げるため、漏電防止対策が必要。
侵入防止柵の外側に2〜3m幅の緩衝帯を整備。

○設置後の効果
被害前は約3割の食害(乾物収量70t/10ha×30%≒21t)で、食害を恐れ、夏作の飼料は作付けできませんでした。設置後は、一部漏電部分から侵入が見られたものの、柵点検後の侵入はなく、夏作飼料の作付けによる大幅な増収効果が確認されました。

また、被害額を代替え飼料費で試算した結果、被害金額よりも少ない経費で設置することができ、コスト的にも十分見合う結果となりました。



谷間のシカネット設置